

(46)(47)(50)。大型の歴名木簡の削屑と考えられよう。このような形態の完形の木簡の例は知られていない。

(63)は武蔵国播磨郡の養錢付札。(65)の糸君益人は約五年後の天平宝字二年(七五八)には従八位上・仁部省史生の写経生として写経所に出仕している。(66)の中務栗宮は、中務卿栗栖王か。

年紀を有する木簡の時期は天平勝宝五年前後に集中する。第七七次調査で東楼の解体を天平勝宝五年の前半に想定した。今回の調査で天平勝宝五年一月(58)の削屑が出土しており、東西楼は天平勝宝五年頃にあいついで解体されたと考えられる。今回西楼から出土の木簡は内容的には雑多であるが、全体として一連の解体工事に伴って廃棄された木簡群とみることができよう。なお、衛門府関係の木簡がみられる状況は東西楼出土木簡で共通するが、いずれにも門部とみられる者がみあたらない点には注意を要する。

9 関係文献

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』三七(二〇〇三年)

同『奈良文化財研究所紀要二〇〇三』(二〇〇三年)

(馬場 基・渡辺晃宏)

奈良文化財研究所『平城宮出土墨書土器集成』Ⅲの刊行

平城宮の発掘調査で出土した墨書土器について、一九八六年の二冊目の刊行以来待望久しいシリーズの第三冊が刊行された。今回は一九八六年の第一七二次から、二〇〇〇年の第三一六次までの調査で出土した墨書土器一〇一七点の釈文を掲げ、主要なものの鮮明な写真や実測図を収録する。ここ一五年間の平城宮の墨書土器の全貌を把握できる資料集である。

墨書土器も、木簡と同様出土した遺跡・遺構が重要な意味をもつが、出土遺構の簡潔な紹介が付され便利である。また、土器の器種や器形の凡例図が新たに付され、文字を記す媒体としての土器そのものについての理解を助けてくれる。さらに、今回紹介される墨書土器の多くが出土した内裏東大溝SD二七〇〇について、主な墨書土器の出土地点図を掲載するなど、細かな配慮の行き届いた資料集となっている。

A四版五六頁、図版七二葉、二〇〇三年三月刊行

定価五〇〇〇円(税別)『平城宮出土墨書土器集成』Ⅱも在庫あり
市販分のお問い合わせ・お申し込みは左記へ。

真陽社 電話 〇七五―三五―一六〇三四

FAX 〇七五―三五―一六四六